

日進月歩するデジタル製品を、「使い勝手」ではなく、「実装された新技術」と「製品の革新性」をテーマにレビューしていくコーナー。

石井英男

## FOMA 701iシリーズ (NTTドコモ)

### ドコモの新サービスはiモードよりも 簡単なプッシュ型コンテンツ配信

#### 70Xiシリーズの登場により FOMA への移行が加速された

701iシリーズは、NTTドコモのW-CDMA方式を採用した第3世代携帯電話FOMAの最新機種だ。FOMAのスタート当初は、サービスエリアが狭い、対応端末が大きく重い、バッテリー駆動時間が短いなど不満が多く、なかなかユーザーが増えなかった。しかし、サービスエリアが拡充し、2004年2月に「900iシリーズ」が登場したことによって、PDCからFOMAへの移行が本格化した。累計加入者では、まだPDC方式のほうが多いが、毎月の純増数ではFOMAがPDCを大きく上回っており、累計加入者数でFOMAが上回るのも時間の問題だ。

FOMA対応携帯電話は、フラッグシップモデルの「90Xiシリーズ」と普及モデルの「70Xiシリーズ」に大別できる。当初は、ヘビーユーザーが中心であったために90Xiシリーズのみだったが、FOMAの認知度の向上とともに、2005年2月には普及モデルの第一弾「700iシリーズ」が投入された。700iシリーズは端末の価格も90Xiシリーズに比べて安く、FOMAへの移行を一段と加速させることになった。

#### サービスをオンにするだけで 最新情報が表示される

今回登場した701iシリーズは、700iシリーズの後継である。テレビ電話対応や着うた対応といった基本的な機能は700iシリーズと同じだが、「iチャンネル」と呼ばれる新サービスに対応したことが特徴だ。iチャンネルは、プッシュ型コンテンツ配信サービスで、Macromediaが開発したケータイ向け情報配信技術「FlashCast」を採用している。通常のiモードサービスは、ユーザーが自ら欲しい情報を求めてケータイを操作する必要があるのに対し(プル型)、iチャンネルはサービスに加入するだけで自動的に最新情報が端末に配信されることが特徴だ。なお、現時点でiチャンネルに対応している端末は701iシリーズの3製品のみだが、今後登場する「902iシリーズ」などでも標準搭載される予定だ。

iチャンネルのコンテンツは、Flashベースで記述されており、NTTドコモ自身が配信する「ベーシックチャンネル」とコンテンツプロバイダーなどが配信する「おこのみチャンネル」に大別できる。ベーシックチャンネルは「天気予報」「ニュース」「芸能・ス

ポーツ」「占い」「iモードサイト情報」の5種類があり、AM6:00から翌AM2:00までの2時間おき(計10回)にコンテンツが更新される。iチャンネルの利用料は月額157.5円(税込)で、ベーシックチャンネルのコンテンツ料金やパケット通信料も、この利用料に含まれる。ただし、パケット通信料がかからないのは一覧画面の表示までで、詳細情報の表示には別途パケット通信料が必要になる(右ページ参照)。

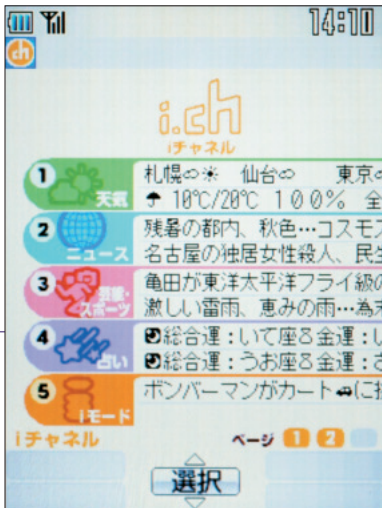
ベーシックチャンネルで配信された情報は、待ち受け画面にテロップ表示させられるので、ユーザーが特別な操作をせずとも常に最新情報を確認できるわけだ。

iチャンネルのコンテンツは、ドコモのサイト内で詳細が公開されているため、独自にチャンネルを作って公開することも可能だ。ただし、配信にはFlashCastサーバーが必要であるため、基本的にはコンテンツプロバイダーなどの法人がターゲットとなる。個人でもiチャンネルを利用できるようなASPサービスが登場すれば、またおもしろい利用法が考えられそうだ。

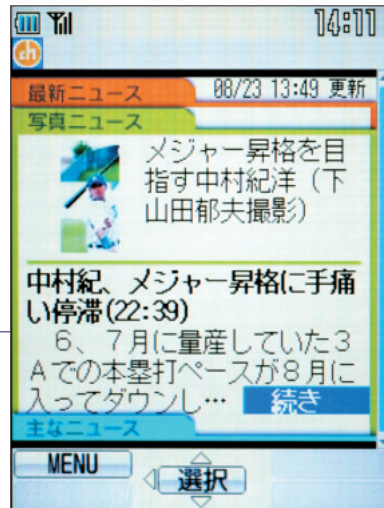
フルブラウザ搭載製品が登場するなど、携帯電話は高機能化が進んでいる。その反面、操作が複雑化し、使いこなすのが難しくなってきた。iチャンネルは自動的に最新情報が配信されてくるので、携帯電話の操作に習熟していない人でも気軽に利用できる。普段持ち歩いている携帯電話に常に最新情報が配信されてくるというのは、PCに比べてよりユビキタな端末である携帯電話の長所を活かしたサービスであり、今後の携帯電話向けコンテンツサービスの新たな方向性を示したものと見えるだろう。

## [ Reviewer's View ]

FOMAの普及機として位置づけられる701iシリーズだが、モバイルFelicaを搭載していないことを除けば、上位の901iSシリーズと比べても機能的には遜色はない。iチャンネルはケータイ操作が苦手な層をターゲットにしたサービスであり、気軽に利用できる。唯一の弱点は料金面だ。auとは異なり、NTTドコモでは、月額6,930円(税込)のタイプM(新料金プランの場合)以上のプランでないと、パケット定額制「パケ・ホーダイ」を使えないという制限がある。



iチャンネルボタンを押すと、iチャンネルの一覧表示画面が表示される。ここまでなら、パケット通信料はかからない。



一覧表示でジャンルを選んで、決定ボタンを押すと、サーバーに接続して情報を取得し、詳細情報が表示される。詳細情報の表示には、パケット通信料がかかる。

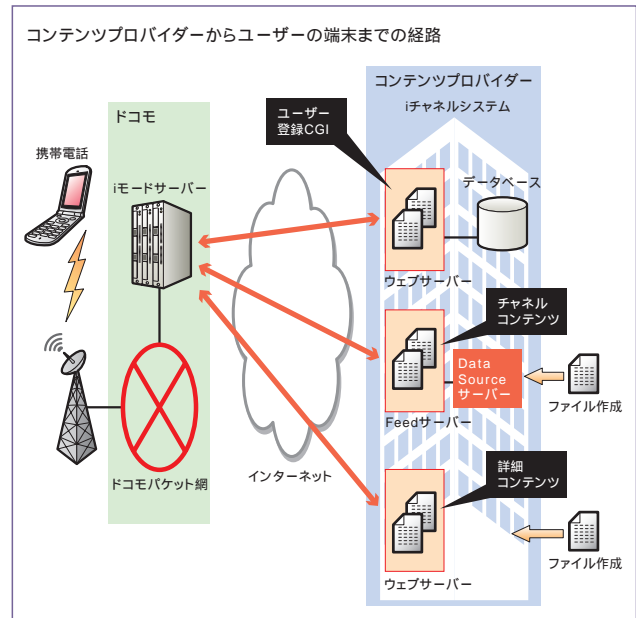
701iシリーズ3製品は基本的な機能は似ているが、デザインなどで差別化を図っている。N701iは着せ替えパネル「スタイルプラス」に対応していることが特徴だ。D701iは、アシンメトリーなデザインが特徴で、背面のサブ液晶にiチャンネルの情報を表示できる。P701iDはボディカラー3色それぞれにマットとグロスが用意されており、マットは角の取れたラウンドデザイン、グロスは角のあるスクエアデザインを採用。ユーザーの好みに合わせて選べる。



iチャンネルで受信したニュースの見出しや天気予報などのコンテンツは、待ち受け画面や背面液晶にテロップとして表示できる。



左から三菱電機製のD701i、パナソニックモバイルコミュニケーションズ製のP701iD、NEC製のN701i。D701iは写真のオリーブのほか、ブラックベリーとチェリーが用意されている。P701iDのボディカラーは、写真のグロスホワイトのほか、グロスブラック、グロスコーラル、マットホワイト、マットブラック、マットコーラルが用意されている。N701iボディカラーは、写真のオレンジ×ブラウンのほか、ホワイト×シルバー、ライトブルー×ブラウン、ブラック×ブラックが用意されている。



iチャンネルのシステム構成。コンテンツを提供するには、FlashCastサーバー、ウェブサーバー、データベースなどから構成されるiチャンネルシステムが必要になる。FlashCastサーバーは、FeedサーバーとData-Sourceサーバーから構成されている。

# 液晶 IT-TV IT-32X2 (シャープ)

## 液晶テレビが DLNA に対応すると 個人の AV ライフを大きく変える

### IEEE 802.11a/b/g 対応 無線 LAN 機能を搭載

IT-32X2は、ネットワークメディアプレイヤー機能を搭載した32型液晶テレビである。アナログRGB入力やDVI-I入力を備えるなどPCとの親和性も高いため、単なるテレビというよりは、チューナー内蔵多機能モニターといったほうがふさわしいだろう。

単体のネットワークメディアプレイヤーは各社から発売されているが、TV自体にネットワークメディアプレイヤー機能を内蔵した製品は、ほかには東芝の37LZ150/32LZ150がある程度で珍しい。さらにネットワークへの接続は有線LANと無線LANの両方に対応しており、無線LANを利用した場合はケーブルを接続する必要がなくなり、電源ケーブル1本をつなぐだけで映像を楽しむことができる。

### DLNA ガイドライン対応で 他社製品との接続も可能

付属のメディアサーバーソフト「SHARP Media Library Server」をPCにインストールすることで、PCをDLNAに対応したメディアサーバーとして利用できる。再生可能なフォーマットは、動画がMPEG-1/2、WMV9、静止画がJPEG/PNG/BMP、音楽がMP3/WMA/LPCM/WAVであり、標準的なファイルに対応している。

最大の特徴がDLNAガイドラインへの対応だが、試しにDLNAサーバー機能をもつアイ・オー・データ製NAS「HDL-AV250」(P113参照)にアクセスしてみたが、問題なくコンテンツの再生が可能であった。

チューナーを内蔵したいわゆるテレパソが普及したことで、PCでテレビ番組を

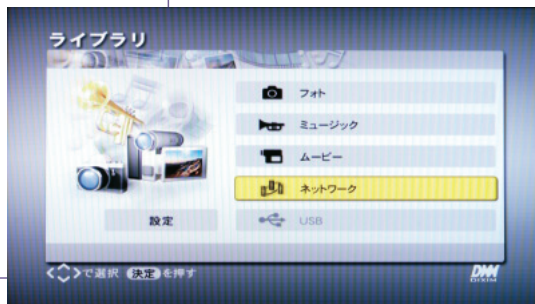
## [ Reviewer's View ]

シャープが誇る亀山工場製液晶パネルを採用しており、表示品位は優秀だ。PCと接続して、最大1360×768ドット表示が可能であり、リビングなどでPCモニター兼テレビとして使うにも最適だ。無線LAN内蔵なので、PCで録画した番組を見るためだけなら、電源ケーブル1本だけで済むのだ。価格はやや高いが、ネットワークメディアプレイヤー機能を搭載していることを考えれば、納得できる範囲だ。ただし、地上デジタルチューナーやBS/110度CSチューナーを搭載していないのが残念だ。

録画したり、iTunesなどでCDをMP3化したりといった使い方をしている人も多いだろう。書斎にあるPC内のコンテンツをリビングの大型テレビで気軽に再生できるというのは、使ってみるとなかなか便利だ。テレビが単なる番組受信機からマルチメディアコンテンツへ自由にアクセスできるパーソナルな窓になった感覚である。そうしてみると、DLNA対応TVは家族でというよりも、自分だけの部屋で使うのにマッチしている。今後は、個室にもマッチするような小さな画面サイズを増やすなど、ラインナップの拡充に期待する。



**IT-32X2** は、ネットワークメディアプレイヤー機能を搭載した32型液晶テレビ。ASV方式低反射ブラックTFT液晶(1366×768ドット)採用で、黒が締まった美しい表示を実現。内蔵チューナーは地上アナログチューナーのみだが、D4端子を搭載しており、外部にチューナーを接続することで、ハイビジョン映像も楽しめる。有線LAN機能と無線LAN機能を内蔵しているほか、アナログRGB入力、DVI-I入力端子、USBハブ機能内蔵などPCとの親和性も高い。



# LANDISK AV HDL-AV250

(アイ・オー・データ機器)

## NASがDLNA機能を搭載することが ホームサーバー普及への第一歩

### DLNA対応製品なら 他社の機器とも接続できる

アイ・オー・データ機器のHDL-AV250は、ネットワーク経由で接続する外付けHDDであり、いわゆるネットワークストレージ(NAS)と呼ばれる製品だ。本製品の一番のウリは、業界で初めてDLNAガイドライン(Home Network Device Interoperability Guidelines v1.0)に正式対応したことだ(バッファローのHS-DGLシリーズもDLNAガイドラインに準拠している)。

DLNAガイドラインとは、PCやデジタル機器の相互接続を実現し、ホームネットワーク内で、動画や音楽などのマルチメディアコンテンツをさまざまな機器から楽しむために決められた指針だ。DLNAに対応した機器同士なら、メーカーが違って、ネットワーク経由でのコンテンツの再生が可能になるわけだ。

DLNAガイドラインv1.0が策定されたのは2004年6月であり、まだ比較的新しい規格である。DLNA策定以前は、各社が独自にネットワーク経由でのコンテンツ再生を実現しており、異なるメーカーの製品との相互互換性は確保されていなかった。しかし、今年に入って、シャープやソニーなどの家電メーカーや、アイ・オー・データ機器などの周辺機器メーカーから、DLNA対応ネットワークメディアプレイヤーが発売されるようになってきた。こうした中で、いち早くNASのDLNA対応を実現したアイ・オー・データ機器の先進性は評価に値するだろう。

### DLNAはNASの 標準機能となるか？

HDL-AV250は、同社のNAS「HDLシリーズ」をベースにした製品であり、基本的な筐体デザインは同じだ。ユーザー設定や共有設定、DLNAサーバーの設定などは、すべてブラウザ上から行えるようになっている。HDLシリーズと同様に、USBポートを2基装備しており、USB経由で外付けHDDを増設したり、プリンターを接続してプリンターサーバーとして使ったりできる。容量が同じ250GBであるHDL-250Uとの小売り希望価格の差は1,000円(消費税別)しかなく、コストパフォーマンスも高い。NASとしての完成度も高く、使い勝手も優れている。

バッファローもすでに同社のNASをDLNAに対応させることを表明しているが、今後は個人向けのNASでは、DLNA対応が標準的な機能となる可能性も高い。DLNAに対応する機器は、今のところほとんどがパソコンだ。しかし前

## [ Reviewer's View ]

NASは各社から発売されており、差別化を図ろうとしている。そうした中で登場したHDL-AV250は、業界に先駆けてDLNAガイドラインに対応したことが魅力だ。ファンレス設計で高い静音性を実現していることも評価できる。ただし、インターフェイスが100BASE-TXなので、純粋なNASとしての性能は、ギガビットイーサ対応製品に比べると見劣りする。今のところ、HDD容量は250GBのみだが、より大容量の製品やギガビットイーサ対応製品の登場を期待したい。

ページで紹介したシャープIT-32X2のように今後はDLNA対応TVが各メーカーから発売される予定がある。そうなったとき、パソコンからだけでなくTVからも利用しやすいDLNA対応のNASが大いに活躍する場が現れる。

**HDL-AV250**は、DLNAガイドラインに業界で初めて対応したネットワークストレージだ。DLNAガイドライン対応のネットワークメディアプレイヤーを利用して、ネットワーク経由でコンテンツの再生が行える。デジオン製のDLNA対応メディアプレイヤーソフト「DiXiM Media Client」も添付されている。容量は250GBで、ファンレス設計を実現。また、背面にUSBポートが2基用意されており、外付けハードディスクを増設したり、プリンターを接続したりすることもできる。





## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)